

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」



フィクション劇場 第二十八話

(第50回シナリオステージランプリ応募作品)

「カメラマン」

大太 大

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている出来事
や疑問に思っていることなどに対して、
「もし、こういう設定や条件になった
ら、当事者たちはどう動くのか」を考え
た「性根の曲がった社会派オムニバスド
ラマ」です。フィルムバイヤーで第二十七
話まで公開中、それらと同様に著作権完全
フリーです。詳細は、まとめて公開してい
る第一話〜第二十七話のイントロをご覧
下さい。X(旧Twitter)もやってい
ますので、そちらも是非。

https://x.com/ota_daidai

それでは、本編をどうぞ。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

【あらすじ】

毎朝新聞桐山支局勤務の水間孝は報道写真の世界的な賞であるピューリツァー賞受賞を目指すカメラマン。

ある日、戦場カメラマンの経験を持つ写真家、石田文弘の写真展に赴いた際、本人と遭遇する。石田は「時代を切り取る写真」が撮りたいと話す水間を気に入り、展示会後に話をしたいと誘う。水間は喜んでそれを受ける。

石田は、水間に戦場カメラマンは、あくまで第三者の立場を貫く必要があると説く。

また、石田は自身を有名にした何枚かの写真を展示しなかったに触れ、フリーだった当時、写真を売る必要があり、自分で被写体を選んだものでは無かったからだと説明する。

そして、石田はピューリツァー賞を受賞した有名な写真を例に出し、「時代を切り取る写真」には、切り取った部分以外のことが消えてしまう「危うさ」があると指摘し、それを心に留めていて欲しいと水間に助言する。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

その後、桐山支局の取材エリア内で通り魔事件が起きる。水間は先輩記者の木村浩人と現場に駆けつけ写真を撮るが、石田の言葉が頭をよぎり、現場の撮り方や支局長小川康二の写真選定に不安を抱く。しかし木村は手の届く範囲でベストを尽くすしかないと諭す。

数日後、今度は同所属記者の高石研一から自身の家の近くで火災が発生したと連絡が入る。水間は妻の里美からの電話で、長男の蓮と二人とも差し迫った状況ではないと把握し、取材のため現場に向かう。現場に着いた水間は、それほど親しくなかった隣人の堀田弘子と、その長女の紗奈が危険な状態だと分かる。水間は人命救助と報道カメラマンの役割との間で葛藤するが、救助を優先する。

火災から半年後、水間は支局を辞め、カメラメーカーに転職する。水間は里美に、これからは一枚の写真を見ただけで、その時の事が全て思い出せるような、家族の写真をたくさん撮ると告げる。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

【登場人物】

水間 孝（みずま・たかし）（33）：毎朝新

聞 桐山支局勤務。報道カメラマン

水間 里美（みずま・さとみ）（32）：孝の

妻

水間 蓮（みずま・れん）（7）：孝の長男。

小学一年生

石田 文弘（いしだ・ふみひろ）（80）：フ

リーカメラマン。戦場での従軍カメラマ

ン経験を持つ

小川 康二（おがわ・こうじ）（47）：孝の

上司。同支局 支局長

木村 浩人（きむら・ひろと）（35）：同支

局勤務。孝の先輩記者。

高石 研一（たかいし・けんいち）（30）：

同支局勤務。孝の後輩記者。警察記者ク

ラブ担当

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

堀田 弘子（ほった・ひろこ）（35）：孝の

隣人

堀田 紗奈（ほった・さな）（8）：弘子の長

女。小学二年生

交通事故時の当事者の車の運転手

交通事故時の当事者の怪我人

交通事故時の警察官1～3

交通事故時の救急隊員

交通事故を見ている通行人

写真展スタッフ1（女性）

写真展スタッフ2（女性）

写真展の客

喫茶店の店員1（女性）

喫茶店の店員2（女性）

喫茶店の客

警察記者クラブの記者

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

通り魔事件時の怪我人

通り魔事件時の警察官

通り魔事件時の救急隊員

通り魔事件を見ている通行人

火災時の規制線担当の警察官

火災時の救急隊員

火災を見ている通行人

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

○交通事故現場（道路・金曜日の夜）

自動車と自転車の接触事故。

事故車両が路肩でハザード。そばにひしゃげている自転車。事故車両の後で、ランプを点灯させて止まっている警察車両。現場周辺に規制線とコーン。

横を通行する車を誘導する警察官1。事故車両の運転手に話を聞いている警察官2と3。

ストレッチャーで怪我人を運ぶ救急隊員。遠巻きに見ている通行人。

その様子を道路の反対側から写真に収めている水間孝（33）。

水間「……」

写真を撮り終えて、スマホで支局長の小川康二（47）に電話をかける水間。発信音が鳴り、「ガチャ」と電話を取る音。

水間「もしもし、小川支局長ですか？ 水間です。国道の事故の件ですが、写真を撮り

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

終わりました。今からメールで送ります。それをデータベースの方に。はい。よろしく
願います」

電話を切り、リュックからノートPC
を取り出そうとする水間。座ろうとし
て、首にかけていたカメラを路肩にぶ
つける。

水間「ヤバッ！」

カメラを持ってファインダー越しに景
色を覗く水間。ピントが合っていない。

水間、カメラを見て、

水間「まいったな……。でも、取りあえず写
真を送らないと」

水間、ノートPCを開き、カメラからS
Dカードを取り出してノートPCに差
し、メールを送信する。

○水間の自宅・外観（翌日土曜日・昼）

新興住宅地の二階建て一軒家。

○同・水間の部屋（同）

二階。

ドアと反対方向に机、その上にカメラのクリーニングキット。机の奥に卓上時計とブックエンドに挟まれた十冊ほどの戦場カメラマンや有名写真家の書籍・写真集。その中に「ピュリツァー賞受賞写真 全記録」。机の横に三段のデスクーター。全ての段にカメラとレンズ。

前日、使っていたカメラとレンズをクリーニングしている水間。

水間「これで……、どうかな……？」

カメラとレンズを接続し、ファインダーを覗く水間。ピントが合っている。

水間、カメラを見て、

水間「よし。メンテの人を呼ばなくてもよさそうだ」

ドアを開けて入ってくる息子の蓮（ア）。
大声で、

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

蓮「ねえ、お父さん！ 家にいるなら遊んでよ！」

水間、机に向かったまま、

水間「蓮、明日遊んでやる約束だろ？」

妻の里美（32）、ドアから半身、小声で、

里美「孝さん……」

水間、振り返り眉をひそめて、

水間「里美もか？ 明日だって言ってるじゃないか」

里美「でも……、今日は有名な写真家の方の展示会があるから……。蓮も我慢してたのに……」

ハッとして、卓上時計を見る水間。時刻は十二時過ぎ。

水間、急いでカメラをデシケータの中に入れ、立ち上がって蓮の頭をポンポンしながら、

水間「蓮、ゴメンな！ 明日、いっぱい遊んでやるから！」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

上着を取って、階段を駆け降りる水間。
水間を見ている里美と蓮。

里美・蓮「……」

○同・外観（同）

玄関をドンと開けて、道路を走って行く水間。

電柱に「桐山市 王寺町二丁目」の街区表示板。

○写真展示会会場・外（同）

入り口の道路に山型の自立看板。

看板に「石田 文弘 報道写真展」、

「本日最終日 10:00～16:00」の文字。

○同・会場内（同）

会場入り口に白い布をかけた長机。長机の後に座っているスタッフ1。
会場内に客。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

後手で一枚の戦場写真を食い入るように見ている水間。

水間の横から近づいてくる石田文弘（80）とスタッフ2。石田は、背広姿で「石田 文弘」と書かれた来賓用のリボンを付けている。

石田、水間に、

石田「どうですか？ その写真は」

石田の顔をチラッと見て、また写真に目を向けて、アゴに手をやる水間。

水間「うーん、いい写真なのですが……、アングルがもう少し右の方が……」

石田、後手にして、

石田「ははは。戦場では『はい、チーズ』と言う訳にも行きませぬのでね」

水間「それはそうですが……」

石田の方を向き、来賓用リボンの名前を見て驚く水間。

水間「い、石田先生ですか!？」

石田、笑顔で、

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田「ええ、そうですね」

水間、平身低頭で、

水間「す、すいません。大変失礼なことを言
ってしまって、申し訳ありません！」

石田、片手で制して、

石田「いえいえ。私はあまり顔を出しません
からね。昔の写真くらいしかご存知なかつ
たのでしょうか？」

水間「おっしゃる通りです……。でも、まさ
かいらっしゃっているとは……」

石田、また手を後に組んで、

石田「アングルの話をされていましたが……、
同業者の方ですか？」

水間、気を付けして、

水間「はい！ 毎朝新聞で報道カメラマンを
しています水間と申します！ いつかピ
ユリツァー賞を取りたいと思っていま
す！」

石田「それは、いいですね」

石田、手を解き、おどけて

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田「私は取れませんでしたけど……」

水間、石田に両手を向けて振って、

水間「い、いえ、そういう意味では！」

笑顔の石田。

水間「でも、時代を切り取る写真が撮りたいんです！」

一瞬、表情が曇る石田。

不思議そうな水間。

水間「……？」

石田、表情を戻して、

石田「……どうですか？ 展示会が終わってから、少しお話ししませんか？」

水間、目を見開いて、

水間「よろしいのですか!？」

石田「ええ。あなたがよろしいのでしたら」

水間「もちろん大丈夫です！」

水間、会場を見回し、

水間「ですが、片付けとかは……」

石田「その辺は、スタッフのみなさんにお任せしますから」

石田、スタッフ2の方を向いて、

石田「よろしいですか？」

スタッフ2「はい、かまいません。私どもで

対応致します」

水間、スタッフ2に向かって、

水間「ありがとうございます！」

腕時計を見る石田。

石田「終わるまでもう少しありますから：
…」

石田、出入口を見て、

石田「どこかで時間をつぶ……」

話を遮る水間。

水間「とんでもないです！ もう一度、じっくり見て回ります！」

再び写真を見て回る水間。

笑顔で水間を見る石田。

○展示会場近くの喫茶店・外観（夕方）

別のビルの二階にある喫茶店。窓際に座っている水間と石田。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

○同・店内（同）

談笑している客。その中に男女のカップル。

ソファーに石田、椅子に水間。二人ともホットコーヒーを飲んでいる。

石田「十年目……、ですか」

水間「はい」

石田「では、ご家族も？」

水間「はい。妻と息子がいます」

石田「転勤などは？」

水間「幸い……。ただ……、戦場カメラマンはもう……」

石田「そうですね」

石田、おどけて、

石田「まあ、離婚でもすれば、話は別なのでしょうが……」

水間「縁起でもないことを言わないで下さい！」

石田、笑顔で、

石田「ははは。冗談ですよ」

水間、コーヒーを飲もうとカップに口を近づけている石田に、

水間「石田先生。戦場カメラマンというのは、どんな感じだったのですか？ 本で読んだことはあるのですが……」

手を止めて、水間を見る石田。

石田「『先生』はやめて下さい。『さん』付けでいいですよ」

水間「すみません」

石田、笑顔で、

石田「謝ることはないですよ」

石田、表情を戻して、

石田「どう、と言われると難しいですね……。本をお読みになっていたのでしたら、大体のことはご存知だと思いますが……」

水間「いえ、先……、いや、石田さんから直接お話しをお聞きしたいのです」

石田を直視する水間。

石田「……分かりました。では、お話ししま

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

しょうか……」

コーヒーを一口飲む石田。カップを置く。

石田「まず、一般的に戦場で取材をするカメラマンを『戦場カメラマン』と呼ぶことが多いのですが、実際には戦争当事者のどちらかと行動を共にする『従軍カメラマン』になることが多いです。私もそうでした」

水間「従軍している当事者の方に肩入れするようなことはなかったのですか？」

石田「ありません。あくまで第三者です。報道の人間は当事者にはならない。これは基本のところだと思いますが？」

水間「はい。私もそう言われています。……では、なぜ『従軍』なのですか？」

石田「端的に言えば、生活できないからです。私はあくまでカメラマンであって、戦場でサバイバルをしている訳ではありません。機材の他に、水や食料などを何日分も持つて移動することは無理です。無くなれば調

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

達が必要になりますし。それに現地の言葉も分かりませんでしたから」

水間「確かに……。では、そう言った類のもののは？」

石田「ええ。支給してもらっていました」

石田、苦笑いしながらソファに寄りかかって、

石田「まあ、食事は良い時とそうでない時がありましたかね」

水間「？」

石田「もちろん、従軍する側の……」

石田、手を見て指を折りながら、

石田「『許可』と『協力』と『理解』……」

石田、水間を見て、

石田「が、必要ですが……」

水間「……そうなりますね」

コーヒーを一口飲む水間。

石田「ところで、水間さん。この写真展を見ている、何か気づいたことはありませんでしたか？」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

顔を少し下にひねって、口を手をやる

水間。

水間「そう言えば……、石田さんの戦場写真で有名と言うか……、代表作と言うか……、そういう写真が何枚か無かったような気がしました」

水間、口から手を離し、石田を見て、

水間「『あれっ？ 無いなあ』って」

石田「おっしゃる通りです」

水間「ご承知の上で、外したのですか？」

石田「はい。そうです」

水間「なぜですか？」

石田「外した写真は、私が撮ったものではないからです」

水間、両手を机の上に置き、身を乗り出して目を見開き、

水間「石田さんの写真ではなかったんですか!?」

石田「私の中では……、そうなります」

水間「でも、それって大変なことじゃないん

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

ですか!? ウソをついていらしたのですか!?」

石田、水間の目を見て、

石田「いえ……、そうではありません」

怪訝そうな顔をする水間。

水間「？」

石田「私の話を聞いて頂けませんか？」

身を戻す水間。

水間「……はい」

石田、机の上で手を組んで視線を逸らしつつ、

石田「私は当時からフリーのカメラマンとして活動していました。私は戦争の悲惨さを伝えようと、戦地に飛び込みました。しかし、自分の考えていた戦場とは少し違います、と感じたんです」

水間「違う、と言いますと？」

石田「確かに前線はひどいものでした。亡骸があちこちに放置されていたり、地雷で車が壊されていたり、こちら側で親しくなっ

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

た兵士の方が撃たれて亡くなったり……。カメラを構えるのがやっとでした」

水間「……」

石田「……でも、前線から離れば、そうでも無かったんです」

水間「悲惨では無かったと？」

石田、手をそのまま水間を見て、

石田「戦争に悲惨ではないことなどありませんよ。ただ、私が想像していたような……。兵士全員が二十四時間、塹壕で銃を構え続けている、というものは無かった、という事なんです」

水間「では、どんな感じだったのですか？」

石田「普段と同じ生活をしているところもありました。お酒も飲めて、小さな娯楽施設などもあって」

水間「そういうところもあったんですね……」

石田「ええ。戦争をしている地域と言っても、そのくらいの差があったのです」

水間「……」

石田「それで、私は戦争中のところにもこういう場所があるんだということを伝えたいと思いました。いろんな見方をして欲しいと。ですから、そういう写真も撮ったのです」

目を逸らす石田。

石田「ただ……」

水間「ただ……？」

再び、水間を見る石田。

石田「先ほどお話ししましたように、私はフリーでした。ですので、写真を売ってお金を稼ぐ必要がありました。フィルム代とかもかかりますしね。それで、撮った写真を通信社に買ってもらっていたのです。当時はインターネットやデジカメのメモリなどはありませんでしたから、ネガの持ち込みでした」

水間「それで、売れたのですか？」

石田「それなりに……。ただ、通信社からは、もっと刺激的な写真が欲しいと言われ

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

ましてね」

水間「刺激的、というのは？」

石田「一言で言えば……、残酷で凄惨な写真です。そういうものの方が新聞社などに売
りやすい、ということなんでしょう」

水間「でも、それだと報道ということでは……」

石田「そうです……。ですが、お金を稼がなくてはならなかったのも事実です。私としては不本意でしたが、そういう写真もたくさん撮りました」

水間「……それが、展示会で外した写真だったと？」

石田「おっしゃる通りです。皮肉なものだと思います……。私は戦場に限らず、どうい
う被写体を選んで、どう撮るかカメラマンが自ら決めるものだと思っています。で
すから、それらの写真のシャッターを切っ
たのは、確かに私です。しかし、私の写真
ではないのです。そう思っている……、い

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

や、そう思いたいのですよ。逃げていると言われれば、その通りなのですが……」

水間「……外した写真にそういう理由があったのですね」

石田「ええ……」

水間は目を伏せて、

水間「私には、難しい……、としか……」

石田「そうですよね」

× × ×

店員1「ありがとうございます」

出入り口のベルが「カラカラ」となり、

出ていく男女のカップル。

テーブルの上を片付けて、拭いている

店員2。

× × ×

石田「ところで、先ほど水間さんは、『時代を切り取る写真』が撮りたいとおっしゃっていましたよね？」

水間「はい」

石田「では……」

コーヒーターを脇によけて、テーブルの上で、両手の親指と人差し指で水平に四角を作る石田。それを上に動かしながら、

石田「その『時代を切り取る写真』の……」

石田、片方の手を外し、テーブルの上で手のひらを回すように動かしながら、

石田「切り取った残りの部分のこと……」

石田、水間を見ながら、

石田「考えたことがありますか？」

少し驚く水間。

水間「えっ？ いや、そんなことは考えていませんでしたが……」

両手を戻す石田。

石田「私も昔は深く考えたことはありませんでした……。ですが、戦場に行って、その『限界』と『危うさ』を知ることになったのです」

水間「……先ほどの写真を売る話ですか？」

石田「それもあります……」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田、またテーブルの上で手のひらを
回すように動かしながら、

石田「私は出来るだけ多くのことを伝えようと、意図的に切り取らないようにしようと考えていました。先ほどの戦争地域の差のようなものです。ね……。ですが、戦場で起きてきていること全てを伝えるのは不可能です。何百人のカメラマンが何万枚の写真を撮っても無理でしょう？」

水間「はい……。そうですね」

石田「……と、言うことは、どこかを切り取らなければならない。つまり、全てを伝えることに『限界』を感じたのです」

水間「しかも、切り取る場所にも注文がついて……」

石田、再びテーブルの上で手を組み、

石田「おっしゃる通りです」

水間「……」

水間、身を前に傾けて、

水間「……では、『危うさ』というのは、どう

いうことなんでしょうか？」

石田「水間さんは……」

石田、右手をピストルの形にして、自分の右のこめかみを当てて、

石田「この写真、ご存知ですか？」

ハツとする水間。

水間「知っています……。言い方は別として有名ですし、ピュリツァー賞の写真集は持っていますので……」

石田「……でしたら、私のお話しした『危うさ』の意味、分かりますよね？」

水間「はい……」

石田を見る水間。

水間「あの写真で撃たれた人は、服装だけを見れば一般人に見えますが、撃った側への潜入者の可能性が高く、捕虜として拘束されていた……。撃った人間は、それを踏まえて『撃たれた人間は自分の仲間をたくさん殺した』……と。そして、そのカメラマンは……」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田、水間の話を遮って、

石田「撃った側の人生も奪ってしまった……
ですね？」

目を伏せる水間。

水間「はい……」

石田「あの写真だけを見れば、撃った側が一方的に残酷なことをしたように見えます。しかし、そこは戦場です。私たちカメラマンの知らないところで逆のことが起きていたかも知れません」

水間「……そうですね」

石田「確かに戦争の悲惨さを伝えるには十分過ぎる写真でしょう。ですが、写真を見た方が全員、水間さんがおっしゃったことを知っている訳ではありません」

水間「ええ……」

石田「ある意味、写真だけが一人歩きする形になってしまった。カメラマンも、それに苛まれていたようですしね」

水間、石田を見て、

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間「でも……、苛まれるようなら何かできることはなかったんでしょうか？」

石田「例えば？」

水間「撃つのを止めるとか……」

石田「それはできません」

水間「どうしてですか？ 報道は当事者にはならないのは分かっていますが、人の命の問題なのに……」

石田「それは承知しています。しかし、あくまでも報道は第三者です。どちらにも付くことはありません」

水間「……」

石田「もし、相手側に肩入れすれば、信頼を失って、協力が得られなくなります。こちら側に何かをして、それが取り返しのないことになっても同じことです。水間さんがお考えになっているよりも、機敏な話なのです。特に人の命に関わる戦場と言うのは……」

水間「……」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田「でも、私の写真が新聞に載ると、一般の方からは『写真を撮っている暇があるなら、助ける』とお叱りを受けることもあります。水間さんもそういうご経験がありませんか？」

水間「話には聞いたことはありますが、今のところはなんとか……。ただ、最近は自分の振る舞いがネットで拡散されることもあるので、強引なやり方とかはしないように気を付けてはいます」

石田「そうですね」

水間「それに……。戦場での写真のようなことは、滅多にありませんから……」

石田「ええ。結局、カメラマンというのは伝えることしか出来ないんです。それを保身や言い訳だと捉える方が居ても、それは仕方がないことだと思っています。飲み込むしかない……、と」

水間「はい。戦場で、というのは実際に行っただ方でないと想像が付きませんし……」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

石田「基本的に非日常ですからね。ただ、今の自分たちの状況を伝えて欲しいから撮ってくれ、ということもあるのですよ。もちろん詳しい注釈などは付きませんから、誤解を招く恐れはあります。ですが、そういう時は買ってもらえるかどうかに関わらず、迷わずシャッターを切ります」

水間「多分……、私もそうすると思います。と言うか……、そう出来たら……」

石田、手を組んで、

石田「ですが、最近の戦争や紛争の報道を見ていると、違和感を感じることもありますね」

水間「カメラマンの姿勢や取材の方法とかですか？」

石田「いえ、報道の仕方です」

水間「それは？」

石田「これは私の個人的な意見ですが、どこかでそういうことが起こると、『何人の方が亡くなった』という形で報道がされます

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

よね？」

水間「はい」

石田「しかし、カメラマンに限らずジャーナリストが巻き込まれると名前や所属・経歴などが報道されますよね？」

水間「そんな感じですね……。それに何か問題があると思われているのですか？」

石田「ええ。片方は詳しく報じているのに、もう一方は『数』だからです。人の命に変わりはないのに」

水間「……」

石田「どういった経緯でそういうところで取材をすることになったのか、私は存じません。それに、お話ししているように、報道は第三者です。当事者以外の人間が巻き込まれたから、という考え方もできるのでしようけれども」

水間「そうですね」

石田「戦場カメラマンというのは、そういう『数』の部分にも目を向けて、取材するも

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

のだと私は思っているのです。その撮って欲しい、と言っている方たちのような」

水間「……」

石田「ただ、今はスマホのカメラで動画を撮って、インターネットに上げるような時代です。戦場カメラマンの存在意義も薄れてきている感じもしています」

水間「テレビの報道でもそういう映像をよく見ますね」

石田「ええ。しかし、今でも戦場に飛び込むカメラマンはいます。ですが、私がこんな歳になったら……」

石田、目を伏せて、

石田「そういう仕事は……、無くなると思っていますいたのですがね……」

水間「……」

石田、片手を首に回して、

石田「いやあ、湿っぽい話になってしまいましたね。歳を取ると説教臭くなってしまっ
て」

水間「いえ、貴重なお話をさせて頂いて」

石田「別に戦場に行かなければピュリツァー賞が取れない訳ではありませんし、水間さんの人生に踏み込むつもりはありません。ただ、そういうことがある、こういう考え方があ、ということだけは心に留めておいて頂きたいのです」

水間「はい」

石田「じゃあ、口直しに機材の話でもしまし
ようか。最近のカメラは覚えることが多く
って、年寄りにはどうにも……」

水間「私で良ければ。その代わり古いカメラ
のことを教えて頂けませんか？ メカ部
分の多いカメラ、好きなんです」

○同・外観（同）

日が暮れようとしている中、窓越しに
談笑している水間と石田。

○水間の自宅へ向かう道（同日・夜）

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

歩いている水間、立ち止まって空を見上げる。

水間「……」

再び歩き出す水間。

○水間の自宅・玄関（同日・夜）

玄関のドアを開けて入ってくる水間。

水間「ただいま」

玄関に来る里美。

里美「孝さん、お帰りなさい。遅かったのね。

何かあったの？」

水間、小声で、

水間「展示会の先生と話しをしてたんだ」

里美、声を弾ませて、

里美「良かったじゃない！ タメになる話は

聞けたの？」

水間「ああ……」

里美「……あんまり嬉しそうじゃないみたい

だけど」

水間「そうでもないよ」

里美「ご飯は？」

水間「まだ。そっちは？」

里美「私と蓮は先に食べちゃったけど……」

水間「じゃあ、俺の分だけ置いておいてくれ。

温めて食べるから」

里美「分かったわ」

階段を上がって自分の部屋へ向かう水間。

里美「……」

部屋のドアを開けて、デシケーターを見る水間。

水間「……」

ため息をつき、両手を首の後ろで組んで、椅子に寄りかかりながら、デシケーターを見る水間。

水間「……」

○ 毎朝新聞 桐山支局・外観（昼）

三階建ての雑居ビル。三台分の駐車場。

運転席・助手席の両方のドアに「毎朝新

聞」の文字が入った車が一台。

ビル入り口の案内板に「3F 毎朝新聞
桐山支局」のプレート。

○同・入り口前（同）

磨りガラスの扉に「毎朝新聞 桐山支
局」の文字。

○同・部屋（同）

壁を背にして、支局長の小川康二（47）
の机。小川の前に向かい合わせで一列
の机。水間と木村浩人（35）は横隣り。
ノートPCを操作している三人。
椅子にステンカラーのコートをかけて
いている水間と木村。資料や書類がう
ず高く積まれている机。
手の動きが遅い水間。

木村、それを見て、

木村「どうした水間？ 調子でも悪いのか？」

水間、木村の方を向いて、

水間「木村さん……。いや、大丈夫ですけど……。何か変な風に見えましたか？」

木村「変って訳じゃないんだが、最近、暗いと言うか何と言うか……。イヤなことでもあったのか？」

水間「そういう訳ではないですけど……」

木村、水間の背中を叩いて、

木村「問題なきやいいよ。とりあえずはネタ探した。役所のホームページとかで、市のイベントとかを確認してみるか。いいネタ見ついたら教えてくれよ」

水間「はい」

ノートPCを操作する三人。

○桐山市警察署前（同）

警察署のエントランスから飛び出してくる高石研一（30）と数名の記者。スマホを取り出して、木村に電話をかける高石。呼び出し音が鳴る。

○毎朝新聞 桐山支局・部屋（同）

木村のスマホが鳴る。「高石」の表示。
電話を取る木村。

（カットバック始め）

木村「高石か？ 何か、あ……」

高石、木村の言葉を遮って、

高石（声）「桐山駅前で通り魔です！」

木村「通り魔!？」

木村を見る水間と小川。

× × ×

高石「そうです！ 刃物を持った奴が暴れた
とのことですよ」

木村（声）「犯人は？」

高石「その場から逃げたみたいですよ。警察が
追ってます。まだ捕まっていますよ！」

× × ×

木村「分かった。で、どっちに行けばいい？」

× × ×

高石はメモを見て、

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

高石「に」

×

×

×

高石（声）「しぐちです！」

（カットバック終わり）

電話を切る木村。

小川、木村を見て、

小川「木村、犯人はどうなっていると言っ
いた？」

木村「まだ捕まっていないそうです」

小川「分かった。水間と二人で頼む」

木村「はい」

水間「はい」

木村「支局長。車、使います」

小川「ああ。犯人のこともある。気を付けて

取材してくれ」

水間・木村「はい」

椅子にかけてあったステンカラーの
コートと机の横に置いてあったリュック
を持つ水間と木村。

部屋を出て階段を駆け降りる二人。

○桐山駅 西口（同）

桐山駅西口前のロータリー。

救急車とパトカー。救急隊員に手当さ
れている怪我人と、それを見ている通
行人。

近づいてくる毎朝新聞の車。運転席に

木村、助手席に水間。

木村「お前は先に降りろ。俺はどこかに車を
止めてから来る」

水間「分かりました」

車を降り、ガードレールを跨いで、歩道
に入る水間。辺りを見まわし、怪我人が
いる場所を把握する。

水間「……」

「西口」と書いてある階段に向かう水
間。

×

×

×

階段を登り切って身を乗り出し、現場

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

の様子を撮影する水間。

水間「……」

一人の怪我人を見る。

×

×

×

見た怪我人の後ろ側に移動し、カメラを構える水間。

怪訝そうな顔で水間を見る一人の通行人。

それに気づく水間。

水間「……」

数枚シャッターを切る水間。

×

×

×

別の怪我人の血痕が残っている歩道の写真を撮ろうとする水間。

怪訝そうな顔で水間を見る別の一人の通行人。

それに気づく水間。

水間「……」

数枚シャッターを切る水間。

×

×

×

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

救急車に乗せられる怪我人を撮る水間。

○毎朝新聞 桐山支局・部屋（同・夕方）

支局に帰ってくる水間と木村。

木村「戻りました」

小川、席を外している。

水間「支局長……、居ませんね」

木村「ああ。でも、作業は始めるぞ」

水間「はい」

机の上でノートPCを開く水間と木村。

カメラからSDカードを取り出し、ノ

ートPCに入れて、データを移す水間。

メモを見ながら、ノートPCに記事を

打ち込む木村。

×

×

×

作業を終えて、ため息を付く水間。

水間、木村の方を見て、

水間「……木村さん」

木村、ノートPCの画面を見たまま、

木村「どうした？」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間「……どの写真が、使われるんでしょうね……」

木村「支局長が何枚か選んで、上に送るんだろう。いつもの通りだよ。何でいまさらそんなこと聞くんだ？ 何か問題でもあるのか？」

水間「いえ、出来れば現場の様子がくまなく分かる写真を選んで欲しいと思って……」

木村、水間を見て、

木村「お前、そういう写真も撮ってきたんじゃないのか？ それに紙面の都合もある。他に大きなことがなければ、一面と社会面の両方に載るかも知れない。そうなれば写真は……」

木村、手を見て指を折りながら、

木村「一枚か、二枚か、三枚か。オレには分からんよ。ただ、そうなれば記事の量は多くなる。こっちはその分、書いておかなきゃいけないからな」

水間「そう……、ですよね」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

小川「お前がどう思っているのかは知らないが、オレたちは両手の届く範囲でベストを尽くすだけだ。そうだろ？」

水間「はい……」

再びノートPCに向かって記事を書き

始める木村。

部屋に入ってくる小川。

小川「二人とも、戻って来てたか」

水間「はい」

小川、水間を見て、

小川「写真の方は？」

水間「データベースに入れてあります」

小川、木村を見て、

小川「木村の方は？」

木村、ノートPCの画面を見たまま、

木村「まだ、途中です」

小川「明日の朝刊合わせで行くから、出来るだけ早く頼む。後、警察の捜査状況も入れたい。高石と連絡を取ってやってくれ」

木村「分かりました」

小川「写真は今から見るから、水間は一
旦、上がっている。何かあれば連絡する」

水間「はい」

水間、小川に頭を下げて、

水間「では失礼します」

水間、自分の荷物を持って、木村の横か
ら、

水間「木村さん、お先に失礼します」

木村、ノートPCの画面を見たまま、

木村「おう。気を付けてな」

○水間の自宅への帰り道（同・夕方）

道から家に入ろうとする水間。

スーパーの袋を持った隣人の堀田弘子

（35）と長女の紗奈（8）に気づく。

水間を一瞥して自宅に入って行く二人。

水間「……」

○水間の自宅・玄関（同）

家の玄関ドアを開けて入ってくる水間。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間「ただいま」

玄関に歩いてくる里美。

里美「お帰りなさい」

里美、靴を脱ごうとする水間に、

里美「大丈夫だったの？」

水間「何が？」

里美「駅前で通り魔だって……、テレビでやってたけど……」

水間「ああ、現場に行ったよ。もちろん気をつけてね。後は別の人がやってくれてるから」

里美「そう」

靴を脱ぐ水間。

振り向いて家の中に歩いて行こうとする

る里美に、

水間「ところで、里美」

里美、振り返って水間を見る。

水間「堀田さんと何かあったのか？」

里美「堀田さんって……、お隣の？」

水間「ああ」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

里美「アゴに手をやって、

里美「何かあったのかって言われても……」

里美、アゴから手を離し、水間を見
て、

里美「特に何も無いわよ。気になることでも
あるの？」

水間「いや、さっき家の前で見かけたけど、
何かよそよそしくてね」

里美「その辺はよく分からないわ」

水間「小さい女の子と一緒にいたけど……」

里美「多分、娘さんだと思うわ。紗奈ちゃん
……、って言ったかな」

水間「蓮と遊んでたりしてるのか？」

里美「あまり聞かないわ。確か向こうが一つ
上だったから、蓮も気が引けてるんじゃないわ
いかしら……。けど、いきなりピンポン鳴
らして、『遊びましょう』って言うのも何か
変でしょ？」

水間「そりゃまあ、そうだけ……」

里美「蓮が高学年になって、子供会の役員と

かで一緒になれば、向こうのお母さんと話すこともあるかも知れないけど……。そんなに気になるなら、蓮に聞いてみる？」

水間「いや、いい。もし見かけたら、軽く声がけでもしてくれ。出来る範囲でいいから」
里美「……分かったわ」

○毎朝新聞 桐山支局・部屋（数日後・朝）

ノートPCを操作している水間、木村、
小川。

木村、水間を見て、小声で、

木村「水間。お前、相変わらず元気ないな。
この前載った通り魔の写真、いまいちだったのか？」

木村を見る水間。小声で、

水間「そういう訳ではないのですが……」

再び、木村。小声で、

木村「そんなにもやもやするのなら、次から、支局長に話してみたらどうだ？ 選ばせて下さいって……。けど、ここであんな事

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

件が起こることは滅多にないけどな」

水間「……」

木村、手を首の後に回しながら椅子にもたれて、

木村「まあ、オレたちがここに居るってことは、世の中、平和だってことだ。悪くないよ」

小川、木村を見て、

小川「おい、木村。お前がここに居るってことは、仕事をしてないってことだぞ？ ネットを探して取材に行ってこい！」

木村、手を解いて、

木村「でも、支局長。最近イベントとかにアポを取ろうとしても、断られることが多いくって……」

小川「そういう単発のじゃなくて、二、三ヶ月かけて取材するようなネタも考えてみる。そうすりゃ、夕刊一面か連載が取れるかも知れん」

木村「は〜い」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

ノートPCを操作している三人。

○同（同・夕方）

部屋の窓から差し込む夕陽。

ノートPCを操作している水間と木村。
アポを取ろうと、電話をしている木村。

木村「はい。お手間をおかけしました。ありがとうございます。また、機会があれば是非。はい。失礼します」

木村、電話を切る。

木村「今日も空振りかあ。新聞でネタを探してみようかな」

小川、木村を見て、

小川「バカなことを言うな。オレたちはネタを書く側だぞ？」

木村「冗談ですよ、支局長」

小川「……ったく。特に用事が無ければ、二人ともそろそろ上がってもいいぞ」

水間・木村「はい」

木村のスマホが鳴る。「高石」の表示。

スマホを取る木村。

木村「高石？ 事件か？」

高石（声）「木村さんですか？ 火災です！」

木村「火災!？」

木村を見る水間と小川。

木村「場所は！」

高石（声）「王寺町です！」

木村「王寺町？」

水間を見る木村、木村を見る水間。

木村「王寺町って、お前……」

水間「すみません！」

木村のスマホを引ったくり、立ち上がる水間。

水間「水間だ！ 王寺町のどこだ!？」

高石（声）「火元は分かりません。ただ、かなり燃え広がっているようです」

水間「……」

水間のスマホが鳴る。「里美」の表示。

木村のスマホを置いて、電話を取る水間。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間「もしもし、里美か？　今、そっちの方
で火事が……」

里美の声が遮って、

里美（声）「ごほっ、ごほっ。そう……なの。
ごほっ」

水間「大丈夫か!?　今、どこだ!？」

里美（声）「家の……外。……ごほっ」

水間「蓮は!？」

里美（声）「一緒に……ごほっ、いる……ごほ
っ……わ」

水間「様子はどうなんだ!？」

里美（声）「今のところは……、ごほっ、ちょ
っと煙を……、吸ったみただけど……、
大丈夫……、ごほっ、ごほっ……、みたい」

水間「とにかく、家から離れてくれ！　煙の
こないところで待ってるんだ！　すぐ行
く！」

水間、電話を切り、支局長を見て、

水間「支局長!」

小川「行ってこい」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間、木村を見て、

水間「車、頼みます！」

木村「ああ」

小川「十分気をつけるんだぞ」

水間・木村「はい！」

荷物を持って階段を駆け降りる水間と

木村。

○車内（同日・夜）

運転している木村。助手席で手を組む

水間。

水間「……」

○水間の自宅から少し離れた道路（同日・夜）

警察の規制線。警察官が一人。

それを見て、車を止める木村。

木村「水間、これ以上は……」

助手席から飛び出す水間。

木村「おい、水間！」

規制線を潜って、自宅に向かう水間。警

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

察官、水間を見て、

警察官「君！」

振り返る水間。

水間「毎朝新聞の者です！」

警察官「取材でもこれ以上はダメだ！」

警察官の静止を振り切って、自宅へ走

って行く水間。

×

×

×

○水間の自宅へ向かう道（同）

座っている怪我人を手当している救急
隊員。

見ている通行人。

それを見ながら走る水間。

水間「……」

×

×

×

頭を押さえて立っている別の怪我人を
手当している別の救急隊員。

見ている通行人と肩がぶつかる水間。

水間「すみません！」

自宅へ走って行く水間。

○水間の自宅・外（同）

自宅前の道路に、体を横たえている里美と蓮。

二人に駆け寄り、里美の両肩を持って揺らす水間。

水間「大丈夫か!？」

里美「私たちは……、ごほっ……、大丈夫……でも……」

里美、堀田の自宅を指差して、

里美「ほ、堀田さんが……」

堀田の自宅を見る水間。

玄関口で炎と煙で外に出られない堀田弘子と紗奈。弘子は紗奈を炎と煙から庇っている。

（カットバック始め）

弘子と紗奈を見る水間。

弘子「助けて下さい!」

×

×

×

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

カメラに両手をかける水間。

水間「……」

里美「孝さん、助けてあげて！」

×

×

×

里美を見る水間。

カメラを握りしめる水間。

水間「……」

×

×

×

弘子「お願い！ 助けて下さい！」

×

×

×

震える手でカメラを構えようとする水間。

水間「……」

×

×

×

里美「孝さん、何をしているの!? 助けてあげて！」

×

×

×

水間、強く目を閉じる。

水間「……」

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

里美「孝さん！」

×

×

×

×

×

×

水間「……」

水間、目を見開く。

（カットバック終わり）

（ブラックアウト）

○水間の建替え後の自宅（半年後・朝）

玄関ドアを開けて、外に出てくるスー
ツ姿でカバンを持った水間。その後に
続く里美と蓮。

少し遅れて、堀田弘子と紗奈がゴミ出
しで出てくる。

紗奈、水間を見つけて、

紗奈「おじちゃん！」

水間に向かって、とてとてと走って
くる紗奈。

水間、しゃがんで、

水間「どうした？ 紗奈ちゃん」

紗奈、笑顔で、

紗奈「いってらっしゃい！」

水間、紗奈の頭の上で手を止め、弘子の方を見る。

笑顔で軽く頷く弘子。

水間、紗奈の頭を撫でながら、

水間「行って来るよ」

とととと弘子の方に戻って行く紗奈。

蓮、水間の後から、

蓮（声）「お父さん、ズルい！」

振り向く水間。

蓮「僕にもして！」

水間に近寄ってくる蓮。

しゃがんだまま、蓮の頭をポンポンす

る水間。

蓮「いってらっしゃい！」

水間「行って来るよ、蓮」

里美「蓮、学校に行く準備をして来なさい」

蓮「うん！」

蓮を目で追う水間。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

水間、立って里美の方を向いて、

里美「……孝さん、ホントにいいの？」

水間、建て替えられた自宅を見て、

水間「ああ。保険で建て替えられたとは言え……」

水間、里美を見て、

水間「前の家のローンが、まだ残っているからな」

里美「……」

水間「メンテでウチに出入りしていた人から誘われてね。カメラに詳しいから、こっちで働かないかって」

里美「……」

水間「給料も良かったし、時間もきっちりしてる。蓮とも遊んでやれるしな……。それに……」

水間、肩をすくめて、

水間「『荒っぽい使い方をする人の意見も聞きたい』ってさ」

里美「でも……、なんとかっていう賞を取り

たいてって……」

水間「ははは。あれは小さい頃、宇宙飛行士
になりたいとか、そういう感じのやつだよ」

里美「……」

水間「でも、写真を撮るのはやめないよ。里
美や蓮の写真をいっぱい撮る。どの一枚を
見ても、その時のことが……」

水間、笑顔で、

水間「全部、思い出せるような写真を、ね：
……」

里美「……」

水間、半身で手を挙げて、

水間「じゃあ、行ってくる」

歩いて行く水間。見送る里美。

○同・水間の部屋（同）

机の上にブックエンドに挟まれた風景
や動物の写真集。

机の横に三段のデシケータ―。
一段目にカメラ。

フィクション劇場 第二十八話「カメラマン」

二段目にレンズ。

三段目にプラスチック部分が熱でひし
ゃげた、記者時代に使っていたカメラ
が一つ。

E
N
D

(2 0 2 6 年 2 月 1 6 日 応募)

(2 0 2 6 年 6 月 9 日 公開)